

研究部 原本

昭和二十年年度（昭和二十一年一月—三月）研究報告 其三

成人向 日本語教材

第三期用 說話系列教材

財團法人 言語文化研究所研究部

（編纂擔當者） 研究員 今井 三 明

教養としての日本の説話

研究員 古井三郎

目次

神話	一	天地開闢の語	奈良	古事記	日本書紀
寓話	二	八岐の大蛇	奈良	古事記	日本書紀、古語拾遺
傳説物語	三	雀の思	奈良	古事記	
	四	猫の思	江戶	宇治拾遺	
	五	田舎の茶人	江戶	俟然草	
	六	道場法師物語	平安	雲草雜志	
	七	遠く探	平安	日本靈異記	
	八	善長老の籠	平安	大和物語	萬葉集
歴史説話	九	西八條の風	鎌倉	十訓抄	陸日本記
	十	最後、希望	鎌倉	平家物語	源平盛衰記
	十一	浦島	室町	太平記	増鏡
	十二	かや姫物語	奈良	風土記	萬葉集
	十三	羽衣	平安	竹取物語	源氏物語
	十四	一寸法師	室町	謡曲百番	風土記
御伽説話	十五	金鍋	江戸	新加草紙	
				諸國歌	

研究部保存用

神話 天地開闢

一 古事記

天地の初の時、高天原に成りませる神の御名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。此の三柱の神は、結独神成り坐して、御身を隠したまひ也。
次に國稚く浮脂の如くして、くうりて漂よる時に、葦原の如龍之騰る物に因りて、成りませる神の御名は、宇麻志阿斯訶備比古迩神、次に天之常立神、此の二柱の神も独神成り坐して、御身を隠したまひ也。

上の件、五柱の神は、別天神

次に成りませる神の御名は、國之常立神、次に豊雲野神、此の二柱の神も独神成り坐して、御身を隠したまひ也。

次に成りませる神の御名は、宇比地途神、次に妹須比智途神、次に角杵神、次に妹治杵神、次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神、次に妹母陀琉神、次に妹阿夜訶志古泥神、次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美神。

上の件、國之常立神以下、伊邪那美神以前、并せて神世七代と稱す。

入りますと、即ち、天常立神・國常立神と申し、天上界の無窮の時間性を司り、地上界の永遠の時間性を司る二神と成つたのであります。此の神も、独り身の幽身の神様でした。

其の常立神の次に、初め下陰陽の性格を徴括したつた、田力女の神が、出現に成られました。先づ天地が、泥沼の様な状態と成つて来た時に、出現なさいました男神を、宇比地通神と申し、女神を、須比地通神と申しました。續いで、天地のけじめが分明に成つて来た時に、角式神と、造杖神が出現になりました。次に、天地は、抗なりとか、大きさを持つ格になりました。其時の二神を、大斗乃地神と大斗乃辨神と申す、次に、物の充足の司の男神、面足神が生れ、心の滋徳の司の女神として、惶栲神と言ふ造杖神が出現になつて、天地の物に二界は安定して入りました。

天地の開闢は全く神秘でござりますが、斯様な考案で、神々の世界は愈々賑やかになつて入りました。

次に、萬象誘導の神である、伊邪那岐、伊邪那美、造二柱の神が出現遊ばされました。

先の天地の常立神の時代から後、岐、美二神迄の時代を、造二神世七代と申します。

或時、天神にまゝです。造化の三神が、岐、美二神に、大命を御降になさいました。日蓮の漂蕩つてある國を修理り固北め成せと申され、水の瀝了様な天瓊矛を添へて御授けになり、御依託遊ばされたいのでござぬます。瓊は玉と申すなり、天瓊矛とは、玉の飾りたる鉞と申す、靈妙な神器であつたのです。

二神は、謹んで御命を御受けし、口官修固成の御事

にお立てられ、広太な八尋殿を御造業述べきり、茲には
美二神、依りて、娘を、宿庭の御堂に始りて行つたのであ
ます。

三二六 三册記

八、岐の大蛇

誓約に勝荒んが無状の振舞に神威を犯す神天を活した素戔嗚尊
は、天つ神の叱責を受け、高天原を追放され、出雲の斐伊川の鳥發の地に
廻り着きまゝた。

谷川の清流を眺めて居られた尊は、我身を省みて、亂行の非を悔ひ、
身に染みる彌陀の宿を感せずには居られませんでした。暫く休んで居居
なると、川上の方から一本の箸が流れ来てました。尊は、此の川上に人が居る
と、流石に成つて川添に廻つて居居るに、一人の翁と一人の姫が一人の娘を中
居て注いで居ました。尊は、お前達は何故泣くのか。名前は何と申す者か。と、お
尋ねになりました。翁は、私共は國つ神大出雲見の子と孫で、私は足名稚、妻は
子名稚、娘は神名田姫と申す。私共には本八人の娘がございまして、丁度八
年前に古志の八岐の大蛇が来て、娘を一人食ひ、其水から年々一人宛食つて、今
此の子一人だけになつてしまひました。其水を、天今年も大蛇が来る時節になりま

「たので、かうして毎日泣き悲しくんで居るのでございませう」と申すました。

尊は「八岐の大蛇とはいふな形をいふか」といふと、おのゝと申すに、おのゝの目には酸漿水の様に真赤に輝き、一つの胴は八つの頭と八つの尾があり、体には岩を食へる槍や杵の太木を生んでおる。八つの山谷に渡り、長ツノ大蛇でございませう。おのゝに腹を見ますと、血に塗れ、爛れ切つて居ます」と申すました。

尊は男安あて居らしたたが、公卿は「父那の娘であるなり、此の如くは男安あてい

か」と申すました。公卿は「おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

は、おのゝ尊は、おのゝは天照大神の弟で、今高天原から降りておられたと申す

でした。

千日も飼ふと、雀は大分嬉しくなつたと見得て、お波さんの姿を
見させる事と、「ちう／＼」と呼び止める程でした。

一月も経つと、腰も大分直つたと見得て、羽撃ソイ元気に
啼く様になりました。

或日、お波さんは、雀を籠から出して、飛立てもかどつか
手の上に載せて見ました。すると、始めはふう／＼と居ま
ゝたが、其の中に静かに飛んで行つて、お庭の楓の木に止
つて居ましたが、「ちう／＼」と二声三声別れを惜んで鳴
いたかと思ふと、向かふの竹藪の方へ飛んで行つてしまひま
した。

其日から、二十日程も経ちましたか、楓の木で雀が頻りに呼
ぶ声おきますので、お波さんは、「聞覚えのある声だが、あれが
帰へつて来たのかな」と思つて、楡先に出て見ますと、やはり
「美つてやつた雀でした。」まあ、亡小なう、帰つて
来たものだと、懐かしくさうに由りますと、雀も親しくさうに、
お波さんの顔を見て居ましたが、口の中から兩路程の物
落ちて、又飛去つてしまひました。お波さんは、「あれは、
何だろう」と思つて、拾つて見ますと、其れは瓢の種でした。
「あの雀が折角持つて来て下れた種だから」と、其れは白鳥
の良い白鳥へ時きました。

一夏中、大きな縁起草の葉を挿して、日光を充分浴びて居る
瓢も、秋になりますと、珍らしい大きな実が、どつさり生れま
した。お波さんは、大喜びで、近所の人や里の親類の人にも分けてやりま
した。庭でも、朝晩孫達を嬉め皆がどつさり食べました。終ひ
に、中でも秀麗で大きいのを七八つ残して、種を取り、

居るから」と思つて、見ると、釜は街へて居た程と落して、靴人で行つてしまひました。

波女さんは、闇章で、拾つて、三所に廿時と、まゐりました。

程に成りますと、餘り大ききはないか、一本の葛又に、七八つ宛ふりやと、思つた。「これは思ふより少くないから、人には違ふまい」と思つて、誰にも違ひませんでした。

待つて居た子供達は、「お隣で、一本の葛をかつたのに、松葉にも下り、遠い親戚へも分けてやつたさうだのに、家では三本も出来のだから、少しは食べさせても、良さうなものだ」と言つて、ねたりました。「其れもさうだ」と考へた波女さんは、おさいのを五つ六つ切つて、近所へも分けて、子供達にも、考へて食べさせました。そして、一口食べて見ますと、其の苦い事と言つたら、蕪酢ホカ此ではありません。いくら吐いても吐いても苦いので、水を飲むやう、舌を洗ひやり大変な騒ぎになりました。此れでも

直らないで、家中 風邪でも引いた様に熱を出して、寝てしまひました。

「何を食はせたのだ。此んな苦い物を飲んで、死ぬ所だつた」と、近所の人は、怒つて来ましたが、来て見ると、家中の者が、「うん／＼」と、唸つて、寝て居るので、皆其儘黙つて帰つてしまひました。

「此れは、きつと早く取つた所だ」と考へて、残りの瓢は、霜の降る頃迄、残して置きました。そして、どつさりお米も取らうと思つて、大きな桶も、幾つも造くりました。波女さんは、湯大煮に成る事を考へては、歯の無い大きな口を開いて、にた／＼笑つては、昔々で居ました。

或日、もう、待ち切れないと、泣いて、残りを取つて来て、切つて見ると、何も是も、重いの許りでした。大喜びで、大きな桶の中へ明けて行きました。明け終つて覗いて見ますと、どうでせう。蛇や、蛙や、百足や、蜥蜴や、蛇など、その水は、その水は、気持の悪い物評が、

して居ました。
その時、「あつ」と叫ぶと、其水が一度に龍衣の類いつて来て、刺したり噛付いたり散々を目に合はせました。
到頭、波女さんは殺されてしまひました。

宇治拾遺物語卷之三すめ報恩事 に據る。

三月七、三明記

猫 また

比叡下より花が身に染みまは、平安の都は猫またの
語で賑はした。

「奥山に、猫またと言ふ怪物が、出て人を食ふぞうだ」と言へば、
噂が噂をきいて、猫またに、取著せられたなり。若くは雄猫であ
った場合は、雄を捕へて殺す。雌猫だったら、雌を捕へて殺せば治
る」と、氣の利いた語をする行者もあり、「猫または山に限つた
話では無い。人里でも、年を経て異様な体となつて来ると人
を取るので」とも物知處に語る波々も居た。

或日、一條の行初寺の邊に住んで居た、某の阿彌陀佛と言ふ
法師が、猫またの話を聞いて、「其水は恐ろしい事だ。供は無く
一人歩き、身は、氣を付けなればならぬ」と思つた。
此れ以来、世間の猫が氣に掛つて仕方がなかつた。ともすれば

路傍の雑草が猫またに見えたり、落葉を踏んではおぼろしく
音に驚き、飛が退く事もあった。

深更まで連続に餌がた或夜、大分暗いので猫または出るか
も知れぬ。と暗き中、一人帰へつた。家近くの川の端に差
掛ると、案定、猫またが、小陰から追つて来た。無気味な生
暖さを足元の辺に感ず、ぞつと、周章で、駆け出すと、背後
から飛が著り来た。頭の所へ喰着かるとするらしい。

法師は肝を潰して、逃げようとしても足腰が立たず、気がも
れ、川へ勢いで落ちた。

「助けて下火。猫まただ」と呼び叫んだ。

寺々の家から、人々が照明を燈して走つて来て見ると、此の近く
の見知りの僧だつた。「此水はどくろを言ふ」と、抱起して助中
に見ると、逆勢に賞を得て、扇や小箱を懐に入れて居る。

のに、水に浸つてしまつたのだつた。

丸粒に一生を得た恰好で、すく／＼家に入居る。

一日頃、飼ひ馴れた犬が、闇夜であつたに、倒れ、主の
へりも嗅着け、飛が付いて来たのだつた。

徒然草 八十九段より

三月十日記

田舎の茶人

江戸葛飾。片田舎に、権兵衛と言ふ村長が、ありました。

或年の春、伊弉力大神宮へ太々神樂を上げ、五穀豊饒家内安穩

願ふよと思つて十三人の村人と共に、何某の法師おほの家を尋ねて泊りすと、

法師は遠東の客とばかりに珍らしい湯麩を湯出してくち、揚げて成して下れさ

すが、最後に「昔年の芳に報ゆる為に世清茶を一服立てませ」と申しまし

た。此れも田舎への土産の種になると思つて、言はれる儘に安んじました。

飛石傍に茶室へ行きますと、老樹に松杉を植ゑ、冷み泉水に燈籠

置いた路地の閑寂さは、今も庭園の美を盡くして居り、薄れ日を白壁に映

射けた茶室の床に狩野の山水が珍らしく、爐には松風の音が、

村長を物々しうの村人の座に着きますと、法師は灯籠に注目を

つらし満遊無く配りながら茶を立て、先づ権兵衛の前へ出ました。

田舎者の事であるから、茶道の心得は少しも無いので、困惑しました。村長

と言ふも少し宛飲んで腹に廻すのが作法であると聞いた事があったが一杯
りの此の茶ではとても十三人には廻り切れない」と言つて自分一人で飲んでしまふ
他の人に鼻を明かせれば済まないとも考へ、思案に暮れまゐつた。
長の身で今更其の飲み方を聞かぬ口惜しい事であると思ひまゐつた。

御師はもと少しと思つてか、先程から出さず置いた口取の菓子も村長の前
差出さず、「どうぞ召上つて下さい」と申しまゐつた。お長は茶碗を無意識に取
上げ下居る事に気付き「はっ」と言ふたが、知つた振りをして茶を「ん」と飲
りまひ、又自分の前に置きました。御師は静かた茶碗を取り綺麗に濯
一服立て、村長の前に出さず、粗茶を取下さい」と言ひましたので、今更其
を取つて合せて茶も残さず飲んでしまひ、又前に置きました。御師は更其に
を取つて本の様に濯いで茶を立、村長の前に置きました。

村長は愈々固くなつて、途方に暮れまゐつたが、是れ以上飲めぬと思
ひ、「物はもう海山です」と漸くの思ひで申すまゐつた。「其れでは次の方へ御
下さい」と言はれたので、冷汗を拭ふ事が出来まゐつた。

十三人の村人は、村長の為た通りに一服飲んで、菓子を含へ、又一服を飲
遊々の態で座敷へ引き返へまゐつた。そして作法を知らなくて一時はと
すかた心配したが、権兵衛さんの為る通りに為れば良からうと思つた事や、
が切れて堪えられなかつたのに、十三人が飲み終る迄待つて居なげれなかつた
た事をと話し合ひ、若くは昨朝も茶の接結があつたら何うい様」と心配
たが、相談の結果、翌朝は未明に起きて帰國の途に著く事にして休ま
村に帰へつてから、「茶は飲む事より味ふ事が大切、何故牛前の侍様
先ほどの餘裕が無かつたものであつたか」と、長者に笑はれて秘言入つたと言
とす。

雲萍雜志に基づく 二、四、二、三 明記。

道場法師物語

昔、船名余澤語田宮御宇天皇の御代に、尾張國愛知郡片藪里に
農夫が住んで居ました。

或夏の一日、田に水を引かんと思つて、田圃迄行きますと、俄に夕立とな
りました。其處で、傍の大木の根元に腰を下ろし、金の杖を突いて、雨を
けり居りました。

ひかり、と無気味な青白い光が差し込むと、程ど同時に、かろ／＼とや
と荒涼しい音がしました。農夫は金の杖を大地に突立てた儘思はず
び止りました。雷が落ちたのです。氣を沈めて見ますと、雷の子が農夫
の前に突き突いて平伏して居ました。農夫は再び驚きました。お前は何か
たいと尋ねて見ました。雷は、「私は貴方の金の杖の影陰で、岩角に落ちた
たなつて済みました。其の御禮に、子供をお授け致します。私の舟に桶の船を
作り、笹の葉を敷いて海に浮かべて下さい。」と言いました。農夫は言はれた通り、

てやります。雷は、黒雲を靡かして、やがて天に昇って行つてしまふ。

其後、農夫の家にお産があらうと云ふが、生れた赤子の所へ時々戯れ来い乳飲ませて、大きくなって居る事が解りました。生れて十三の折には、最早一人前立派な田か子と見誤り推して。

其の當時、朝廷に、すほら一い大方の王が居ると言ふ噂があらうと、天皇は

「よく、都に上つて、王を尋ねて、方試をしよう」と申して、都に向つて出立

した。御所に着いて、椅子を調らうと見ますと、池所の東北の角の別院に、大方の王

が住んで居る事が解かりました。

其の疑ひがかりたる春の二日、王は夜、隅の方にあつた、八尺四方もあると思はれた大石を

池門の所へ持て行つて立掛して、人が出入り出来なくなつたと見ると、それと院の中

へ引籠つてしまひました。

「名に聞えた大方王とはあの人の事だ。一つかうかつてやりう」と考へた皇は、其の

人に氣附かれなう様にして、其の大石を、本ある所より高一尺許、館の方へ近づけて

置っておきました。お皇朝王は、此の御覽を、烈火のやうにお怒りになり、再び大

石を池門の所へ持つて行かれました。

其の翌朝は、今又又三尺許も此方へ寄せて大石を置かれ居るではありませんか。王

尚更お怒りになつて、大石を池門の外へ出さうと申しました。それでも其のお皇朝

更に四尺も館に近づけられ、大石が置かれ居りました。此の分では、明朝は八尺、其の

次日には十六尺、それより三十三尺と近づけられ、院の中へ大石が持ち運ばれ、時が暮

と思ふと、滾石の大玉もあつたりして、大石を動かす気にも成りません。良く見ま

すと、大地の上に三寸許も踏込、それだけ足跡が、點々と存するのはありませんか。近頃

池所の邊をうろつて居る皇の侍業は、違ひないと思附かれますと、又腹立たうと、右

つて来ました。池門の外へ出て、池邊に立ちますと、其のみすほら一い皇の侍業は、

立つて笑つて居ました。王は益々立腹されて、其の皇を捕へて、因は合はせ

うとお怒りになり、追は掛けました。

皇は、池邊の上をぐるぐる廻つて逃げますか、どうして捕へられませんか。王は

2

津の舟に渡りて、今日迄、自分は日本一の大力持と信じて居たが、
到底及ぶものではないと、御や、おまうて、童子を捕へて、怒めやうと考
へて、
聞も存人、童子は、大前夜、元興寺の成僧の童子となり、
其坂、元興寺には、奇怪な事件が續いて居ました。其坂は、夜毎に鐘堂の童子が
一人づつ、満ちて無くなると言ふの初。為に寺は上を下への大路を
夕方になると、家々は固く戸を閉めて、心配して居ると言つた有様
其處で、此の童子は、此坂は鬼畜、仕業に相異なる。一つ退治して、人々の火を救つて
やうにと申して、衆僧に相談して、鐘堂の四隅に燈火を置き、鬼畜を捕へたが、
に體して、公体を見居りよと言ふ計畫を立てました。

童子は、其の夜唯一人で鐘堂の中に入り、鬼畜の現れぬのを待ち構へて居ました。夜十
は、鐘堂の中に三時に近づくに行きますと、ぎいと音がして、衆僧が少し開けられたか
と思ふと、大鬼が現れ込みました。童子は、一時は驚つて逃げましたが、大鬼は衆僧を其儘に
置き、童子は、今交現れたなら、捕へてやうかと、思つて、
童子は、行つて見ました。童子は、今交現れたなら、捕へてやうかと、思つて、

隠れて固唾を飲んや待て居りました。

派と一陣の生暖い風が吹き渡つたを思ふと、長い影を振動した悪鬼が現れ、
吹き乍ら逃げやうと、狂ひ廻りました。然し童子は、影を固く握つて、
早く大光で、鬼めを捕へた。早く燈火を照らせよ。と叫びました。其處の衆僧
は、鈴の物凄さに、捕まてを料め、はかり、近附かるとする者もありません。鬼は死物
狂ひで、逃げやうと暴れ廻ります。童子は大力を出して、一歩一歩大鬼を鐘堂の中へ引
き入れました。

囃しく悪鬼を打拂ひ

東の空が微かに白らぶ頃、終りに鬼の髪が抜け、鬼は呻吟き乍ら一散に逃げ
て行つてしまふ。夜が明け下から、血痕を便した手取で行つて見ると
大鬼は、往遠くない、無縁佛の墓の隅に倒れて死んで居ました。
悪鬼が退治されたと言ふので、奈良の人々は、安心して眠り、事が出来やうになりました。

此の物語は、今おまうて、童子を捕へて、怒めやうと考へて、聞も存人、童子は、大前夜、元興寺の成僧の童子となり、其坂、元興寺には、奇怪な事件が續いて居ました。其坂は、夜毎に鐘堂の童子が一人づつ、満ちて無くなると言ふの初。為に寺は上を下への大路を夕方になると、家々は固く戸を閉めて、心配して居ると言つた有様其處で、此の童子は、此坂は鬼畜、仕業に相異なる。一つ退治して、人々の火を救つてやうにと申して、衆僧に相談して、鐘堂の四隅に燈火を置き、鬼畜を捕へたが、に體して、公体を見居りよと言ふ計畫を立てました。童子は、其の夜唯一人で鐘堂の中に入り、鬼畜の現れぬのを待ち構へて居ました。夜十は、鐘堂の中に三時に近づくに行きますと、ぎいと音がして、衆僧が少し開けられたかと思ふと、大鬼が現れ込みました。童子は、一時は驚つて逃げましたが、大鬼は衆僧を其儘に置き、童子は、今交現れたなら、捕へてやうかと、思つて、童子は、行つて見ました。童子は、今交現れたなら、捕へてやうかと、思つて、